研究会報告

租界・居留地班　第 78 回研究会

中国各地の租界と日本の神社景観

日時：2022 年 7 月 14 日（木）15:00〜17:00
場所：対面＋Zoom のハイフレックス開催
対面会場：横浜キャンパス・非文字資料研究センター会議室

稲宮　康人（非文字資料研究センター　研究協力者、写真家）

2022 年 7 月 14 日、租界・居留地班にて「中国各地の租界と日本の神社景観」というテーマで発表を行った。戦前の中国に造られた神社については研究が非常に少ない。今回は、神社が租界に造られたのは何時なのか、という基礎的な主題の発表とした。

各租界がたどった歴史の中に神社造営の時期をおいてみると、大きく二つに分けることができた。それは日中戦争の前か後か、という単純な、考えてみれば当然の分岐点であった。この原稿では、各租界の名を社名にもつ都市の鎮守ともいえる神社を中心にとりあげる。また、租界以外に造られた神社もとりあげ、租界に造られた神社に特有の条件があるかどうかについての比較検討も試みた。

日中戦争前に造られた神社

日中戦争前、租界に造られた神社は少なかった。上海神社、天津神社、漢口神社が代表的である。

まず、上海共同租界と上海神社についてみる。上海に租界が設けられたのは 1845 年、阿片戦争に負けた清国は南京条約を呑まされ、開港５港のひとつ上海に英国租界が設置された。邦人の渡航が始まったのは、日清修好条規によって清国と国交ができてからだった。上海最初の神社、満洲を含め大陸初の神社である浦東海軍用地にあった琴平神社が、いつできたのかは不明である。1908 年、長崎出身で料亭と植木屋を営む白石六三郎が、料亭の庭園六三園に長崎の氏神諏訪神社を勧請した。場所は居留邦人が多く住んだ共同租界内の虹口地区と華界の境界あたりであった。1912 年に琴平神社を諏訪神社に合祀し、上海地域の別称である滬を冠した滬上神社という名に変えた。しかし、六三園は第 1 次上海事変で戦場になり、滬上神社は壊滅した。居留民会は新たに上海陸戦隊本部の向かい側の土地を確保し、1933 年に上海神社及び境内招魂社を創建した。日中戦争が始まってから 3 年後の 1940 年には、境内拡張と招魂社の上海護国神社への昇格があり、上海神社の隣に拡げた土地に護国神社を造った（図 1）。列強各国が利権をもつ上海

図1　上海神社（左）、上海護国神社（右）（『上海居留民団三十五周年記念誌』上海居留民團編）

の特殊性ゆえ米英と戦端を開くまで日本軍も租界の占領は行わなかったが、太平洋戦争と共に租界にも進駐し、上海全域を日本軍の支配下においた。1943 年、日本は租界を汪兆銘政権に返還したのだが、実権は当然日本軍が握ったままであった。1944 年 12 月 18 日、上海発行の邦字新聞大陸新報に「上海神社 神域を拡張 中国の友愛織込む四万坪 戦争終了後に御造営」という記事が掲載された。この構想の発表時期はサイパン、グアムの玉砕が既に伝えられ、フィリピンレイテ島決戦の大勢も決した後であった。

次は天津である。渤海から海河を遡上した場所にある天津は首都北京の外港という性格をもっていた。天津に初めての租界が設定されたのは 1861 年。英国の租界だった。この後、フランス、ドイツ、ロシア、イタリア、ベルギー、オーストリアが租界を設けた。各国の租界ができた天津は、華北の貿易中心地になり、急激な発展をとげた。日本は日清戦争勝利後の 1898 年、日清通商航海条約で得た租界設置権を使い、天津に租界を設けた。ただし、後発帝国主義国であった日本に残されていた土地は条件が悪く、大規模な埋め立て工事が必要であった。まず殖民者有志が 1906 年に天津稲荷神社を造り、次いで居留民会が大正天皇即位記念として 1921 年に天

図2　天津神社（辻子コレクション）

図3　天津神社（提供　鈴木隆一）新しくできた天津神社、左奥に旧天津神社の社殿も写っている。

津神社を創建した（図 2）。天津神社は、日本租界内に以前からあった大和公園の一画に位置していた。独、墺の租界は第一次世界大戦時、露租界はロシア革命時に中国に回収された。北京神社創建と同じ時期に天津神社の建替が決まった。1942 年に完成した神社はより大規模なものとなり、大和公園全体が神域になった。1943 年、日、伊、仏租界は汪兆銘政権に、英租界は国民党政府宛に返還された。新社殿の資料は数点の新聞記事しか見つけられなかったのだが、発表後、租界・居留地班に寄託されている天津古写真の中に新社殿の写真も含まれていることが判明した（図 3）。

次に漢口をとりあげる。揚子江と漢河が交わる河川交通の要衝であり、北京と鉄路京漢線で結ばれた漢口には、天津と同じく 1861 年に英国租界が設定された。その後、ドイツ、フランス、ロシアも租界を作った。日本租界は天津と同じく日清通商航海条約により 1898 年に設置された。国民党の北伐とともに中国全土で英国に対する租界回収運動が起こり、1927 年に英租界が返還された。独、露の租界は天津租界と同じ理由で回収済であり、この時点で残るは日、仏の租界だけとなった。漢口神社は日本租界の一画に皇太子殿下誕生（現上皇）を記

図4　漢口神社（『写真週報』42 号）

念[i]し 1935 年に創建された。鳥居一基と小さめの本殿だけの小ぶりな神社（図 4 右上）ではあったが、在留邦人と内地を精神的に結ぶ紐帯となっていた。日中戦争の勃発をうけ、全邦人が街から避難した。その間、日本租界は破壊され、漢口神社も社殿がそっくり破壊された（図 4 左）のだが、神社の御祭神も邦人とともに引揚げ難をのがれた。『海外神社の史的研究』を書いた近藤喜博は、その時中支において神社に奉職していた神職から、御神体と共に引揚げる体験を聞き取った際に、「自らの背に負い奉ってゐる御心霊に対し、如何ばかり恐懼し奉った事か」[ii]という感慨を抱き、それが本の執筆のきっかけとなったと記した。日本軍が占領した後、1939 年に漢口神社は同じ場所に同じ社殿で再建された。

日中戦争後に造られた神社

次に日中戦争後に造られた神社をみてゆく。厦門の租界は 1852 年に厦門島につくった英国租界が初めである。それと同時期に厦門島と大陸の間にある小島鼓浪嶼（ころんす）島にも外国人が居住し始め、1903 年正式に共同租界になった。日本は租界として 1899 年に英租界の隣接地四万坪を設定したが、市街地から遠く不便であったため、あまり人気がなく邦人の多くは鼓浪嶼島に住みつづけた。また、台湾の対岸という特性から日本人居留民の多くは台湾籍であった。上海租界での中国人殺害事件に端を発した租界返還運動から、1930 年に厦門英租界は返還された。1937 年に日本軍が厦門を占領すると、邦人は手狭な鼓浪嶼島から厦門市街地へと移っていった。翌年、厦門市街蓼花溪美山の中腹に神社の創建を決め、1940 年に厦門神社が完成した。台湾と関係が深い土地柄を反映して、祭神には台湾の守護神北白川宮能久親王も祀っていた。

杭州には日清戦争の戦果として、1895 年に日本租界が設置されたが、杭州城外の拱宸橋付近という中心市街から遠く離れた辺鄙な場所であった。日本租界の南側には各国通商場が設けられ、日本租界よりは賑わったのだが、上海や天津のような繁栄には程遠い状況であった。結局日本租界には、ほとんど人が住むことがなく、神社

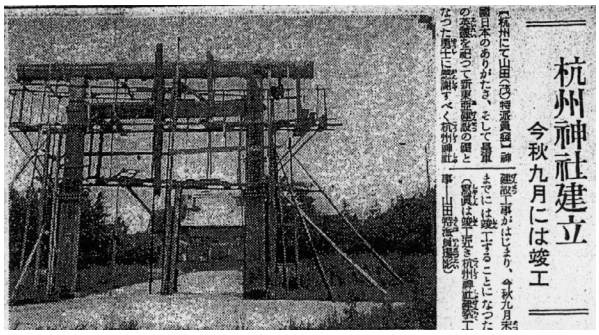

杭州神社建立
今秋九月には竣工

図5　杭州神社（大阪毎日新聞大陸版　1939 年 8 月 16 日）

九江神社鎮座祭

図6　九江神社（大阪毎日新聞大陸西版 1942 年 6 月 21 日）

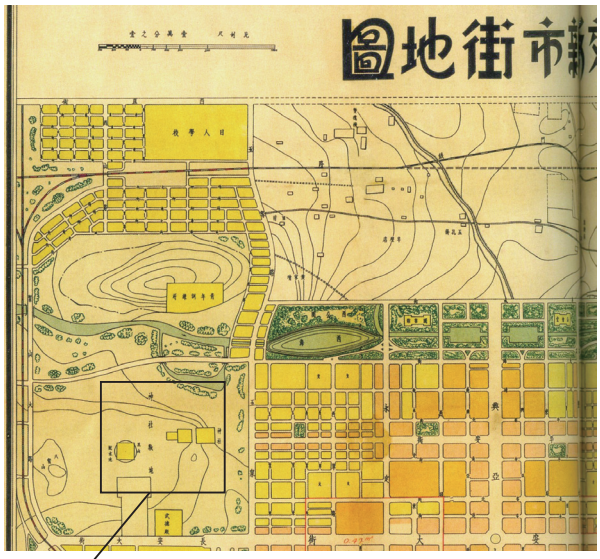
が建てられることもなかった。杭州神社（図 5）ができたのは、1937 年に杭州を日本軍が占領し、杭州全域を支配下においたのち、1939 年になってからであった。杭州のシンボルである西湖のほとりに 10 月 10 日に鎮座し、翌 11 日には秋祭りを開いた。祭りでは、大運動会、軍部隊の相撲大会、そして「特に日本独特の神の有難さを支那民衆に知らしめる」[iii]ために施米を行った。

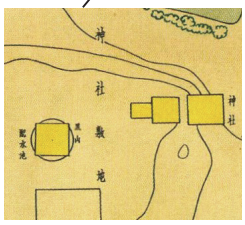
九江は、揚子江と潘陽湖の合流点近辺に位置する河川交通の要地であり 1861 年に英国租界が設置された。日本も九江に租界設置を求める意見がでたことはあったが[iv]、実現しなかった。九江英国租界は、漢口租界に続いて 1927 年に回収された。1938 年に日本軍が占領、1941 年から在留邦人の勤労奉仕（肉体労働）によって神社用地の造成を開始し[v]、翌年、甘棠湖のほとり、湖の中に建つ煙水亭の対岸あたりに九江神社が完成した（図 6）。同じ境内地に九江護国神社もあったのだが正確な創建時期は不明である。

そして蘇州にも神社があった。1896 年にできた蘇州日本租界も日清戦争で獲得したものだった。大運河交易の中心地として「上に天堂、下に蘇杭」といわれるほど繁栄していた蘇州も、上海開港によりその地位を大きく下げていた。蘇州城北西にある閶門あたりが繁華な地だったが、日本租界は蘇州城外の南辺に位置し、その後鉄道駅ができたのが城の北部だったこともあり、租界居住者数はあまり伸びなかった。蘇州神社の創建は 1945 年。鎮座を伝える新聞記事[vi]には、神社の場所は国民学校前広場とある。神社は戦前の邦人の精神の核となっていたゆえ、昭和 20 年になってもなお新しい神社を創建していた。神社の拡大は帝国の崩壊まで止まることがなかった。

租界以外に造られた神社

北京には各国の大使館が集まる東交民巷という地区があり、そこは大使館側が治安維持を行える準租界のような性格をもっていた。日本大使館もそこにあり、大使館の中庭には招魂社があった。1937 年に北京郊外の盧溝橋から始まった日中戦争で日本軍は北京を占領、1940 年に北京城内の南東隅にあった貢院跡地に北京神社を創建した。北京神社は、将来中国で創建する神社の模範になるよう、内地の官国幣社の小社の基準で建てられた。日本軍は占領統治政策の一環として北京城の東西に新市街を開発する都市計画を進めており、北京西郊新市街地内、今の八宝山付近、にも北京神社のため[vii]の巨大な神社敷地が確保されていた（図 7）のだが、そこに新しい





拡大図

図7　北京市東西郊新都市市街地図部分（『老北京地图的记忆』中国地图出版社）

神社が建つことはなかった。

済南にも造った。山東省の首府で、華北華中を南北に結ぶ津甫線と山東半島を縦断する膠済線が交わる交通の

図8　済南神社
英雄山風景区（済南神社跡地）手前の石材が神社の遺構。奥の山の上には革命烈士紀念塔が建つ。

要地済南でも、鉄道駅周辺に発達した新市街の南郊に新都市を計画した。済南神社は、その市街地のさらに南に位置する四里山の麓を切り開いて 1942 年に創建になった。境内地は 24 万 5 千坪という広大さであった。明治神宮が 70 万平米＝約 23 万坪であるので、その巨大さがわかる。とはいえ本殿などの施設は明治神宮と比べるべくもない小さなもので、境内地の多くは神社前広場が占めていた。神社跡地にある英雄山風景区には多くの神社遺構がのこっているのだが、公園内に晒しあげるように放置してある巨大な石灯籠などを眼前にすると、数年しか存在しなかった神社の大きさとそれゆえの空虚さを実感することができる（図 8）。

神社に対する中国人の反応

最後に広東神社についてふれる。広東省広州市には広東神社があった。1934 年に沙面英国租界内にあった日本人小学校の校庭に造られたが、日中戦争時の邦人避難で台湾神社に避難、日本軍占領後の 1939 年に広州市内永漢公園にあらためて広東神社と広東護国神社を創建した（図 9）。非文字資料研究 24 号所収の『広東神社考』鍾剣峰、訳成田紅音には、現地の住民がこれらの神社をどう見ていたかについての証言がある。「「春や秋の祭りの際（毎年 4 月と 10 月）には漢奸や政府要人は皆ここに集まり、境内に入って『亡霊』を参拝した」。また「中国人は皆公園の前を通る時には、立ち止まって直立し、門の中に向かって深々とお辞儀をしなくてはならない、さもなくば大変な目に合うのだ！…… 中国人はここで日本兵によって血を流すほど頭を殴られ地面を転げまわることになった！」。」。占領下、価値観が違う現地住民に対して邦人と同水準の敬神儀礼を強要し、従わない者を問答無用で殴る日本軍の姿の証言である。その結果、敗戦後の広東神社もしくは広東護国神社の壁には現地人によって次のような落書が刻まれることになった。「神社未完成、竟爾低頭滞街、偸生南国、野心難達到、且免追懐故劍、夢断東京、三島九州、掃蕩全憑原子弾、八紘一宇、澄清不見太陽旗！」[viii]（意訳：神社は未完成、頭下げて街をうろつくのはもう終わり、盗人どもの野望は叶わねぇ、日本の暴力時代を懐かしむ気は無、東京の夢は断絶、日本列島は原爆で一掃、八紘一宇も日章旗も二度と見ねぇのは自明）。日本に対する、神社に対する憎しみがよく表れている。これが、中国での神社造営が中国人にもたらしたものだった。

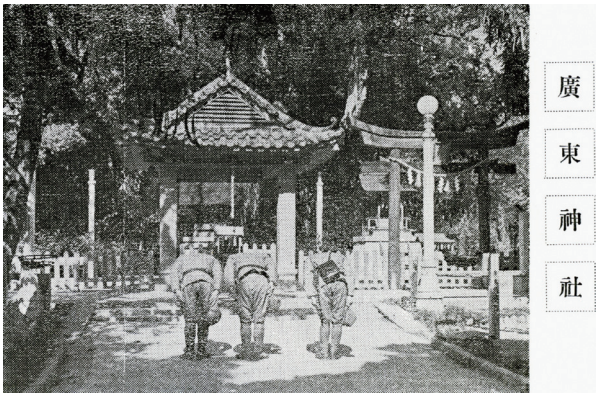


図9　広東神社（おそらく右）と広東護国神社（おそらく左）（南支派遣軍『兵隊 復刻』刀水書房、2004）

おわりに

以上、租界と神社についてざっとみてきたが、租界に共通する神社創建の条件というものは特になく、どこであれ日本軍が占領した後に神社を造営するという共通点を見ることができた。上海の琴平神社のように居留邦人が日中戦争前に自発的に作った小祠もあったが、少数にとどまる。また、紙幅の都合でとりあげることができなかったが、軍が基地や駐屯地に造った神社も相当数確認されている。これらは当然、日中戦争後に造られている。以上の検討から神社創建の契機になったのは軍の占領だったことがわかる。先立って述べておくと、軍占領後の邦人の急激な流入がその背景にあったと考えている。この点もふまえ、あらためて紀要に発表する予定としている。

【注】
i．「本邦神社関係雑件 第五巻 2．漢口神社」アジア歴史資料センター Ref. B04012565400
ii．近藤喜博『海外神社の史的研究』pp. 3-5，明世堂，1943
iii．大阪毎日新聞大陸版「日支親善祭の観ある 杭州神社秋祭大祭 参拝に運動会に数万の人出」1939 年 10 月 15 日
iv．「在支帝国専管居留地関係雑件／九江之部」アジア歴史資料センター Ref. B12082555600
v．大阪毎日新聞大陸版「九江神社敷地整理　邦人が勤労奉仕」1941 年 2 月 6 日
vi．大陸新報「蘇州神社盛大な遷座祭」1945 年 4 月 6 日
vii．大阪毎日新聞北支版「新都北京の建設」1941 年 9 月 27 日
viii．「勝利品和日本神社」人間週刊社『人間』1946 年 1 月 19 日